

会報「人間科学」

No.3(2025)

特集1：人間科学の最前線

特集2：人間科学とは何か

人間科学宣言

情報



Human Science
Intercollegiate Network

全国人間科学系部局連携ネットワーク

全国人間科学系部局連携ネットワーク参加校 (25 大学、創設年度順)

大阪大学

文教大学

早稲田大学

大阪国際大学

大阪人間科学大学

尚絅学院大学

西南学院大学

金沢星稜大学

専修大学

筑紫女学園大学

神戸大学

帝京科学大学

田園調布学園大学

筑波大学

常磐大学

東洋英和女学院大学

武蔵野大学

大阪経済大学

神戸松蔭大学

九州女子大学

東京都市大学

東北文教大学

立命館大学

島根大学

九州産業大学

目次

特集 1 人間科学の最前線

- ・人間科学部：多様な実践的教育研究を通じて多面的に社会貢献する人材を育成する
大阪国際大学 眞鍋 昇2
- ・西南学院における高大連携プログラムと教育実践
西南学院大学 田代 裕一・河谷 はるみ10

特集 2 人間科学とは何か

- ・「人間科学とは何か」を考える
武蔵野大学 相松 慎也16

人間科学宣言21

情報：フォーラム人間科学を開催します22

編集後記23

特集 1 人間科学の最前線

人間科学部：多様な実践的教育研究を通じて多面的に社会貢献する人材を育成する

大阪国際大学 眞鍋 昇

1. はじめに

大阪国際大学はルーツの高等女学校の創立から96年、大学の設立から60年となりますが、「人間科学部」は設置されたのは2002年で2025年現在で23年目になります。人間科学部はスポーツ行動学科、心理コミュニケーション学科、人間健康科学科の3学科から構成され、入学定員が250名です。これまでに6,000名以上の卒業生が、教員、スポーツ部活動の指導者やインストラクターなどに就いて教育や健康支援に取り組んだり、臨床心理士、公認心理師や福祉施設職員として子どもの心のケアや高齢者の生活の質向上に貢献したり、警察官や消防士、健康指導員、福祉介護施設職員などとして人々の安全な暮らしや健康な生活の基盤を支援することで社会に役立つなど、様々な分野で社会に貢献しています。本稿では、2024年12月7日に筑波大学で開催されました「フォーラム人間科学」で講演させていただきました大阪国際大学で行われている「多様な実践的教育・研究を通じた多面的に社会貢献する人材の育成」について具体的な実例を挙げながら紹介させていただきます。

2. 人間科学部を構成する3学科の特徴

人間科学部では、社会に貢献できる力を身につけるため人間を深く理解することを目的に、3つの学科がそれぞれ独自のアプローチで実践的な教育を展開しています。

2. 1. スポーツ行動学科

スポーツを通じて人間の行動や心理を科学的に探究することを特徴として、運動生理学やスポーツ心理学などのような実技と理論を融合したカリキュラムを中心に、スポーツに関わる教育・指導・マネジメントの分野で活躍できる人材を育成しています。多くの卒業生が教員免許（保健体育）を取得して教員として活躍しています。ガンバ大阪や大阪ブルテオンなどのプロスポーツ団体と連携してスポーツイベントの企画・運営などを現場に出向いて体験的に学んだ卒業生がこの分野で活躍しています。地域連携型のフィールドワークを通じて社会貢献力を養成することにも取り組む、卒業後に地方公共団体などに勤めて大学で学んだことを活かして実践しています。

国際的な視野をスポーツを通じて広げるために「する」、「観る」、「支える」を実際に体験できる実践型の海外研修プログラムを実施し、毎年多くの在学生在が参加して成果をあげています。例えば、春休み期間にオーストラリアのグリフィス大学やボンド大学などを訪問し、学生たち自身が研修メニューの企画に参加するなど主体的に学ぶスタイルのスポーツマネジメント研修を行っています。アメリカでスポーツ医学やトレーニング理論を習得するために、現地のトレーナーや施設と連携した実践的なトレーナー研修を実施しています。シンガポールでは学生たちが協定校のシンガポール国立大学（QS世界大学ランキングでアジア1位、世界でトップ10入りの名門大学です）に出向き、現地の学生たちとより一層効率的なアスレティックトレーニングを学ぶ協働研修を継続しています。海外研修プログラムを通じて、学生たちは国際的なスポーツ文化への理解を体験的に深めることができます。受講した学生たちからは「事前研修でしっかり準備していましたが、英語や異文化コミュニケーションに不安がありました。しかし、最終日には現地で不自由なく会話ができるようにまでなりました。」、「初めての海外旅行でしたが、海外のスポーツ現場を体験したりスポーツトレーナー研修を体験することで、自分の将来の進路やキャリアを具体的にイメージできるようになりました。」などと成長を実感しているポジティブなコメントが寄せられています。

2. 2. 心理コミュニケーション学科

心理コミュニケーション学科では、心理学とコミュニケーションを融合して対人関係、メンタルヘルス、カウンセリングなどを体系的に学び、心理的支援や人間関係の改善に貢献できる人材を育成しています。具体的には、公認心理師や認定心理士などの資格を取得す

ることを目指して座学だけでなく実験、演習、フィールドワークも併せて心理学だけでなく、社会学、教育学なども横断的に学習して実践力を養成しています。

このように心理学とコミュニケーションを融合した学びを通じて対人関係や異文化理解に強い造詣をもつ人材を育成していますが、こうした学びを実践的に深めて学生の国際的な視野を広げるための絶好の機会として多彩な海外研修プログラムが用意されています。例えば、夏期や春期休暇を利用した短期海外研修では海外インターンシップ、海外ボランティア活動、海外大学との交流など実践的な体験を重ねて生きた語学研修と異文化理解が身につくように配慮されています。参加学生には「スタディーアブロード」などの単位が認定され、奨学金も支給されます。具体的には、シンガポール、タイ、ベトナムなどに4週間ホテルに滞在してホテル業務を実体験する海外インターンシップ、カンボジアなどの現地の小中学校で授業支援や交流を行う海外ボランティア活動やベトナム、韓国などの現地校に4週間滞在して日本語授業の補助を行う海外ボランティア活動、インドネシアやベトナムなどの大学と交流しながら日系企業視察などを行う海外大学交流研修、カナダ、台湾、中国などの協定校での語学研修などが実施されています。一層チャレンジングな海外研修制度も行われています。個々の学生が、自分の希望に合わせた研修先を世界20カ国50都市から選び、現地の生活を体験できるホームステイや学生寮などの滞在方法も学生が選択し、語学研修や各種アクティビティを組み合わせた自分だけの留学プランを作成してチャレンジする高度海外研修です。

2. 3. 人間健康科学科

人間健康学科では、大阪国際大学の教育理念である「全人教育」を具現化するために「食・からだ・こころ」の3分野を総合的に学んで人間として総合的に成長することを目指し、豊富な実践型授業での体験を通じて学びを深めています。健康であることは人間が幸福に暮らすことの源泉ですが、具体的にどのように健康を維持すればいいのかということを経験する多くの人は意識せずに暮らしています。人間健康学科の卒業生たちは、健康を増進するために運動やレクリエーション、食品や栄養、心理など幅広い領域について実践的に学び、健康運動指導士やフードスペシャリストなどの資格を取得して福祉施設の職員、警察官や消防士などの公務員など様々な領域で社会に貢献しています。また、カゴメ株式会社などの企業との協働プロジェクト（学生がカゴメ株式会社の仮想社員として「野

菜嫌いをゼロにする」プロジェクトを提案し、商品提案やメニュー作りを通じて具体化するものです）に多くの学生が参画したり、全国規模で開催される栄養バランスが良くて手軽に作れる健康レシピコンテストに応募して高い評価を獲得し続けるなど社会実装的体験学習に注力しています。人間健康学科でも他の2学科と同様に多彩な海外研修プログラムが用意されています。特徴的なのは深く学んだ食品、調理、栄養などを基盤としてアメリカ食文化研修を夏季休暇を利用して実施しています。協定校を訪問して特別授業を受けたり、実際に日本食料を供給している農場（日本の食料自給率は38%に過ぎず、大半をアメリカからの輸入に頼っています）を見学するなどの実体験に重点をおいたプログラムです。

このように大阪国際大学の人間科学部では3つの学科が「人間理解」という共通テーマを共有しながら異なる角度から人間科学教育にアプローチし、個々の学生の興味と希望に合わせた進路相談を熱心に行うことで、どの学科も社会で役立つ力をしっかり身に着けた学生を育てています。そのために学科の壁をとりはらった実践的なアクティブラーニングプロジェクトにも取り組んでいます。例えば、ボランティア活動と学んだ外国語の活用を併せて実践できる関西国際空港ボランティアプロジェクトを2015年10月から10年間継続しています。学生たちが、関西空港の入国口から連絡鉄道の改札口まで、外国人旅行者の乗換案内や観光スポット案内などのおもてなしをボランティアで行うユニークな活動です。ほぼ毎週日曜日に学生が個々のスケジュールを調整して参加するもので、活動の企画や研修の多くは学生主体で企画して実施しています。参加した学生たちからは「実際の場面で英語や中国語を使う機会が豊富で、語学力に自信がもてるようになりました。」、「多様な文化背景を持つ人々と交流できてコミュニケーション力が高まりました。」、「ボランティア活動に参画した学生同士の学部を越えた交流が深まり、新しい企画を立ち上げられました（京都や大阪や神戸の若い外国観光客向けの観光動画の制作やJR西日本と協働した安全啓発動画の制作などがスタートしています）。」など好評が寄せられています。この活動は、単なる語学実践の場としてだけでなく「困っている人を助け、自分も成長すること」を目的とした教育的価値の高い活動で、観光客に日本の印象を良くするきっかけにもなっています。

3. 人間科学部におけるゼミ教育の実例

大阪国際大学では学生は1年生から4年生まで必ずゼミに所属します。後半の3年生と4年生では、2年間かけて卒業研究を行うことになっています。人間科学部には35のゼミがあり、各ゼミには各学年9～10名ほどの学生が所属しています。筆者は人間健康学科で毎学年10名ほどのゼミ生を担当しています。3年生と4年生の2年間かけて行う卒業研究での実例を挙げながら、大阪国際大学の人間科学部で取り組んでいる個々の学生ひとりひとりの興味、関心、夢や希望に合わせて社会で活躍できる力を身に着けさせることを目標にしたテーラーメイド的アクティブラーニングを紹介させていただきます。

3. 1. 企業や地方自治体などとの協働研究への参加

多くの学生は、研究指導教員が行っている協働研究や大学、学部、学科が協定を結んで取り組んでいる企業や地方自治体などとの協働プロジェクトに参画して卒業研究に取り組むことになります。著者が担当するゼミに所属する学生の場合、例えば「くら寿司」で提供されている冷凍マグロを解凍後に熟成すると私たちの舌が旨いと感じることができる旨味成分（筋肉に豊富に含まれているアデノシン三リン酸が熟成過程で分解されて生成するイノシン酸やタンパク質が分解されて生成するグルタミン酸などのアミノ酸類など）が増加しますが熟成条件が不適切だと不快成分（筋肉中のトリメチルアミノオキサイドが分解されて魚特有の生臭さの原因となるトリメチルアミンの生成や脂質が酸化されて生成するヘキサナールの発生など）が増えてしまいます。学生たちに手伝ってもらって旨味成分が最大かつ不快成分が最小なマグロの熟成条件を決めることができ、成果はテレビコマーシャルでも紹介されました。この研究がきっかけとなって多くの寿司チェーンが様々な魚種で独自の熟成法を研究開発することとなりました。また、大阪のソウルフードと呼ばれている豚まんを製造販売している551蓬莱とは10年以上にわたって栄養科学的基盤研究を続けてきました。例えば、豚まんの主な成分は豚肉と玉葱ですが、この組み合わせが栄養素の相乗効果をもたらす栄養学的にとっても優れた組み合わせであることを示しました。豚肉に豊富に含まれているビタミンB1（チアミン）は、糖質（ブドウ糖）をエネルギーに変換する際に不可欠な補酵素で、不足すると糖がうまく利用できなくなって疲労感が高まり、集中力が低下し、痺れなどの神経症状などが起こりやすくなります。極端に不足し

た場合には、脚気を発症して死亡することもあります（わが国では、80年ほど前まで脚気は結核とならぶ国民病と呼ばれ、毎年数万人が死亡していました。）。玉葱に含まれているアリシンはビタミンB1と結合し、脂溶性で吸収率が高くかつ持続性に優れるアリチアミンに変化します。551蓬萊の豚まんの場合、豚肉を細かなサイコロ状にカットすることで加工・調理中もビタミンB1が高レベルに保たれ、十分な量の玉葱が含まれているので、アリチアミンのレベルが他の市販品より遥かに高く、疲れやすくて集中力が続かない人の疲労回復や代謝促進に最適なスタミナ食であることを明らかにしました。健康に良くない成分についても検討しています。例えば、健康に対して明確な悪影響があることが科学的に示されているので欧米ではスナック菓子などの加工食品には必ず含有量を表示しなくてはならないものにトランス脂肪酸があります。主に工業的に加工された部分水素添加油脂由来のものが問題視されていますが、食品調理中の油脂の高温加熱や繰り返し使用でも発生します。日本では食事の欧米化に伴ってトランス脂肪酸の喫食量が増え続けており、将来的には欧米と同様に規制しなくてはならなくなると考えられています。551蓬萊の豚まんの場合、調理過程では蒸す操作だけなので高温になることがなく、油脂の繰り返し使用もないのでトランス脂肪酸が発生しない安全な食品であることを示しました。また夏期に売り出されるアイスクャンデーの新商品開発にも参画して若者のアイデアを提案しています。

3. 2. 外部の大学や研究機関との協働研究や海外との協働研究への参加

著者は、東京大学、京都大学、タイのカセサート大学、ハンガリーのブダペスト獣医学大学などの内外の大学や国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所などの研究機関と協働研究を行っていますが、ゼミに所属する学生で各協働研究のテーマに興味がある場合には参画してもらい、成果を国際学術誌を中心に公表してきました（文献1～9）。これらの食品企業や外部大学や研究機関との協働研究に参画した学生の多くは、卒業後外食チェーンなどの飲食系の企業やホテルなどの宿泊系の企業など多くの民間企業の研究開発部門などで活躍しています。

4. おわりに

本稿で紹介したように、大阪国際大学の人間科学部では、礼節を重んじる心豊かで実践力のある人間を育むために人間理解と社会との関わりを軸に、従来からの座学だけでなく、演習、実習、アクティブラーニング、課題解決型学習、地域社会との連携、ボランティア活動、多様な海外研修などの多彩な実践的教育を積極的に実施しています。その結果、教員や認定心理士などの資格を取得して教育機関の教員、国や自治体の公務員、福祉施設や企業の職員などとして多面的に社会に貢献できる人材を育成してきました。

5. 参考文献（協働研究の成果の例）

1. Uchio-Yamada K et al., Tensin2-deficient mice on FVB/N background develop severe glomerular disease. *Journal of Veterinary Medical Science*, 78 (5): 811-818, (2016).
2. Takahashi T et al., N,N-Dimethylglycine decreases oxidative stress and improves in vitro development of bovine embryos. *Journal of Reproduction and Development*, 62 (2): 209-212, (2016).
3. József Rátky et al., Reproductive physiology in commercial and premium pig breeds History of 30-year-long cooperation. *Archives Animal Breeding*, 60: 253–257, (2017).
4. Uchio-Yamada K et al., C1r/C1s deficiency is insufficient to induce murine systemic lupus erythematosus. *Genes Immunity* 3: 1-10 (2018)
5. Manabe N et al., Expression of decoy receptor-3 in granulosa cells during atresia in porcine ovaries. *Thai Journal of Veterinary Medicine*, 49 (2): 57-64, (2019).
6. Wongpanit K and Manabe N, Expression and localization of cellular FLICE-like inhibitory protein (cFLIP), an anti-apoptotic

factor, in corpora lutea during the estrous cycle and pregnancy in Thai swamp buffalo (*Bubalus bubalis*). *Journal of Reproduction and Development*, 66 (1): 29-33, (2020).

7. Uchio-Yamada K et al., Tensin2 is essential for podocyte-glomerular basement membrane interaction and integrity of glomerular filtration barrier. *American Journal of Physiology Renal Physiology*, 318: F520-530, (2020).

8. Uchio-Yamada K et al., Abnormal glomerular basement membrane maturation impairs mesangial cell differentiation during murine postnatal nephrogenesis. *American Journal of Physiology Renal Physiology*, 324(1): F124-F134, (2023)

9. Uchio-Yamada K et al., Ectopic laminin $\alpha 2$ accumulation in the glomerular basement membrane exacerbates podocyte injury in Alport syndrome. *Biochimica et Biophysica Acta Molecular Basis of Disease*, in press (2025)

西南学院における高大連携プログラムと教育実践

西南学院大学 田代 裕一・河谷 はるみ

1. はじめに

西南学院は 1916 年、米国南部バプテスト派の宣教師 C. K. ドージャーによって、福岡市初の男子の私立中学校として創立された。当初 104 名の生徒と 9 名の教職員でスタートした「私立西南学院」は現在、幼稚園、保育所から大学院まで、約 1 万人の園児・児童生徒・学生が学ぶ総合学園である。今なお、キリスト教を基盤とした独自の教育を実践し、奉仕の精神をもって社会に貢献する人材を送り続けている¹。

西南学院大学人間科学部は児童教育学科、社会福祉学科、心理学科の 3 学科で構成され、人間に関する諸学問、および幅広い教養を学ぶことによって、人間についての深い理解、他者を受容し共感する能力、ならびに主体的思考力と総合的な判断力をもった個人を育成することを目指している²。

本学には「学生が自ら育つ、学修者本位の学び」の実現を図ることを目的とし、知的探究心に溢れる学生の新たな取り組みやアイデアを支援する、「学生創発プロジェクト」がある。ピアサポート団体「PEERS MEG（学生課公認）」は、プロジェクトの採択と併せて 2022 年 12 月、西南学院小学校で福祉や障がいへの理解を深めることを目的とする授業（小学 4 年生対象）を企画、実施した³。

¹ 河谷はるみ・梵真沙子「西南学院における中高大の連携プログラムと教育実践」（西南学院大学人間科学論集第 20 巻 第 1 号、2024 年）27 頁。

² （2）西南学院大学「人間科学部 田代裕一学部長挨拶」

[https://www.seinan-gu.](https://www.seinan-gu.ac.jp/faculty_graduate/faculty_department/human_science/social_welfare.html)

[ac.jp/faculty_graduate/faculty_department/human_science/social_welfare.html](https://www.seinan-gu.ac.jp/faculty_graduate/faculty_department/human_science/social_welfare.html)

（最終閲覧日：2024 年 11 月 10 日）

³ 西南学院大学「学生団体『PEERS MEG』が西南学院小学校で授業を行いました」<https://www.seinan-gu.ac.jp/news/2022/14461.html>

2023 年度に入ると、西南学院中学校・高等学校卒業生（人間科学部社会福祉学科 3 年生/当時）と PEERS MEG の学生（人間科学部社会福祉学科 3 年生/当時）が発起人となり、「ともに生きる」というテーマを設定し、西南中高大連携プログラムを企画した。これは、初めて西南学院中学校・高等学校と西南学院大学が連携した教育実践である。発起人の学生たちが「主体」となって実施したことに、西南学院高大連携の大きな意義がある。

それではなぜ、西南中高大連携プログラムを「学生主体」で実施することができたのか。それは、発起人の学生たちが「社会福祉」を学修するなかで、「中学生や高校生が持つ、福祉＝介護という『ふくし』のイメージを変えたい」、「『ふくし』の領域は幅が広く、私たちの様々な生活場面と深く関わっていることを伝えたい」という思いを募らせ、その「思い」を西南学院中学校・高等学校教諭（人権・「同和」教育委員会）に伝え、大学教員（人間科学部社会福祉学科）と繋いだからである⁴。学生たちの「思い」が、西南学院中学校・高等学校と西南学院大学の連携講座を実現させたのである。

2. 西南学院における高大連携プログラム

（1）2023 年度 西南学院中学校・高等学校／西南学院大学人間科学部社会福祉学科

2023 年 11 月、西南学院中学校・高等学校人権・「同和」教育の一環として、西南学院中学校と西南学院大学が連携講座を実施した。はじめに、野田周佑さん（社会福祉学科 3 年/当時、西南学院中学校・高等学校卒業生）が障がい当事者として、「このころのバリアフリー」と題する講演を行った。そして、学生が「白杖」に関する説明を行い、中学生と学生のアイマスク体験（校内）、最後に事前学習からふりかえりまでのワークシートを完成した。これらは全て、学生たちが企画、運営した。連携講座に携わった学生からは

（最終閲覧日：2025 年 9 月 23 日）

⁴ 河谷・梵、前掲書（1）、28 頁。

「交流会を通じて、自分の想像をはるかに超えて中学生に『福祉』の考えが行き届いていることが分かり、交流会を開催した意義があった」などの感想が寄せられた⁵。

2024年3月には、西南学院高等学校と西南学院大学で連携講座を実施した。これも、西南学院中学校・高等学校人権・「同和」教育の一環として、初めて高等学校と大学が連携した講座であった。その内容は学生によるゼミ紹介、西南学院大学教育推進プログラムの紹介、模擬講義、学生の立場から学生生活の紹介、車いす機能のレクチャーであった。参加した高校生からは「大学生は自由な時間が多い一方で、自分自身で時間を有効に活用する必要があることが分かった」、「『福祉』には様々な分野があることが分かり、社会福祉へ興味を抱いた」などの感想が寄せられた⁶。

(2) 2024年度 西南学院中学校・高等学校／西南学院大学人間科学部

2024年度の西南高大連携プログラムは、8月に人間科学部（児童教育学科、社会福祉学科、心理学科）として実施した。そのために「人間科学（部）とは何か」という問いを立て、人間科学部の理念や3学科に共通する「ものの見方・考え方」は何なのか、検討した。その結果、西南高大連携（人間科学部）の目的は、①人権・「同和」学習と繋がり深い人間科学部とジェンダー・人権、社会福祉、心理について学び合う、②大学とはどういうところなのか、どのようなことを学ぶのか等について、大学に実際に行き、ゼミを受けることで、将来についてより深く学ぶ、③オープンキャンパスとは違う形式で、個別具体的に実施できるように計画する、である。共通テーマを「ひとを知る、ひととの関わりを考える」、コンセプトを「知らない世界を知る、多様性を理解する、将来について考える」とした。

内容は、模擬講義、グループワーク（学生生活について）、車椅子体験とした。模擬講義では、各学科の教員が「人間科学（部）とは」を意識しながら、入学案内を用いて、学科の特徴や資格・免許、具体的にどのようなことを学ぶのかを説明した。そのうえで、教員の専門・研究分野を中心とした講義を行い、後半のプログラムであるグループワ

⁵ 河谷・梵、前掲書（1）、33頁。

⁶ 河谷・梵、前掲書（1）、37頁～38頁。

ークに繋がった⁷。グループワークと車椅子体験では、発起人である学生たちが、司会進行等を担当した。高校生は学生生活を中心に、人間科学部での学びや資格・免許、就職活動、アルバイトやサークルなど、率直な質問を学生に投げかけていた。グループワークの雰囲気はとても穏やかで、学生たちは高校生からの質問に丁寧に回答していた。また学生たちは、ソーシャルワーク演習で学んだ知識と技術を活かし、高校生に伝えたい「ふくし」も盛り込んでいた。高校生と話すことを通して、学生自身もまた、これまでの学生生活をふりかえり、今大学で学んでいる意義と専門分野を確認することができたのではないだろうか⁸。

西南学院高等学校（教員）は、プログラム参加後の高校生の反応を次のようにまとめ、大学教員と共有くださった。

「一番印象的であったのは、協働プログラムが終わってからの高校生の様子である。各々、先生や大学生に質問をしていたが、参加した高校生の半数以上が、何かしらの質問をしていた。それだけプログラムの内容が充実していて、話を聞く中で先生や大学生の『人間（ひと）としての温かさ』が伝わったからだと思う。自分の進路について真剣に考える時期とも重なった生徒は、より踏み込んだ質問ができたのではないだろうか。（中略）西南学院中学校・高等学校を卒業した学生の活躍も頼もしく、協働プログラムを通して、西南学院の『中高大』の教員として、お互いに信頼関係が構築できたことも大変嬉しく思っている⁹。」

3. 西南学院における高大連携の意義

西南学院高大連携プログラムの実践の意義は、次の3点に整理することができる。①高校生が大学の先生や学生から、じかに話を聞くことができる。これは高校生にとって最大

⁷ 河谷はるみ・倉元綾子・井上久美子・梵真沙子「西南学院高等学校と人間科学部の協働プログラム」（西南学院大学人間科学論集第20巻第2号、2025年）67頁。

⁸ 河谷・倉元・井上・梵、前掲書（7）、75頁。

⁹ 河谷・倉元・井上・梵、前掲書（7）、77頁～78頁。

の意義である。話を直接聞くことで、高校生は大学で学ぶことの意義を考え、大学生活そのものを具体的にイメージすることができる。これは、確かな進路選択と高校での深い学びや学習意欲につながる。②課題を抱えた生徒の不安の解決・解消に活かすことができる。③学生は高校生に教えることを通して、今大学で学ぶことの意義と専門分野の意義を確認することができる。

また、西南学院大学人間科学部としての高大連携の意義は、次の 2 点に整理することができる。①高校生は、自ら関心のある学科だけではなく、人間科学部 3 学科の内容と特徴を知ること、学部内の学科選択肢が広がる。一例として、児童教育学科と社会福祉学科では保育士（国家資格）が取得できる。しかし、学科における学びの基礎・基盤（教育か、福祉か）と就職先（対象者）は異なる場合がある。また社会福祉学科では、社会福祉士国家試験受験資格を目指す学生のみ、保育士が取得できる¹⁰。これらは、入学案内や学部フライヤーでは分かりにくい。実際に、社会福祉学科で保育士取得を目指している学生に質問することで、理解が深まったと思われる。②模擬講義を担当した教員は、教育学部、社会福祉学部、心理学部ではない「人間科学部」の児童教育学科、社会福祉学科、心理学科をどのように説明をしたらよいのか、そもそも「人間科学（部）とは何か」、「どのようにしたら自分の専門分野から人間科学（部）を理解、説明することができるのか」という根源的な問いを考える機会を得たことである¹¹。

4. おわりに

西南学院における高大連携プログラムは、2023 年度人間科学部社会福祉学科から 2024 年度人間科学部へ、その連携体制が広がった。発起人である学生たちは、常に講座の主体であった。そのため、教員に「自分たちが大学を卒業しても継続してほしい」と訴

¹⁰ 河谷・倉元・井上・梵、前掲書（7）、89頁。

¹¹ 河谷・倉元・井上・梵、前掲書（7）、89頁。

えていた。これからも「人間科学（部）とは何か」という問いを立て、西南学院としての高大連携・協働プログラムの体制づくりを目指していきたい¹²。

〈付記〉

2025 年 8 月、昨年度同様、人間科学部の西南高大連携講座を実施した¹³。その中心は、グループワークである。西南学院高等学校の担当は、人権・「同和」教育委員会から進路指導部になった。ボランティア学生と院生は、西南学院中学校・高等学校出身者から、学部 3 学科のバランスを考慮して選考した。講座当日、発起人の卒業生も全員参加し、連携講座を受講した高校生がボランティア学生になっていること（西南学院大学人間科学部に進学していること）をととても喜んでいた。なお、西南学院大学では、2025 年 6 月、外国語学部も西南高大連携プログラムを実施するなど¹⁴、このような連携活動は他学部へも広がりつつある。

¹² 河谷・倉元・井上・梵、前掲書（7）、91 頁。

¹³ （13）西南学院大学「人間科学部 西南学院高大連携講座が行われました」

<https://www.seinan-gu.ac.jp/news/2025/16690.html>

（最終閲覧日：2025 年 9 月 23 日）

¹⁴ ）西南学院大学「外国語学部による西南学院高大連携プログラム『Seinan FLaSH』が行われました」

<https://www.seinan-gu.ac.jp/news/2025/16613.html>

（最終閲覧日：2025 年 9 月 23 日）

特集 2 人間科学とは何か

「人間科学とは何か」を考える

武蔵野大学 相松 慎也

1. 背景と問題設定

本文私は哲学が専門で、大学以来ずっと古典的な哲学科に所属しておりましたが、つい最近の 2024 年 4 月、武蔵野大学の人間科学部人間科学科に迎え入れていただきました。そのさい、学部長の辻恵介先生より、「人間科学系部局にとって「人間科学とは何か」という問いの探究は避けられない。ぜひ哲学的観点からこの問題に挑戦していただきたい」と、お題を頂戴しました。これは非常に親近感のあるテーマでした。というのは、私の携わってきた哲学も、それ自体として形式的に説明しがたいところがあり、また他の学問との差別化も容易ではなく、やはり「哲学とは何か」という自問が避けられない学問だったからです。そしてまた、哲学研究を通して、ある学問の何たるかは、結局、自らがその学問に携わり続けることで、言語化は困難でも、なんとなく分かってくるものだということも実感しておりました。ですから、「人間科学とは何か」という問題についても、まずは人間科学科の教員・研究者として経験を積むなかで、次第に見えてくるものがあるだろうと楽観的に考えました。……よもや、そのわずか 2 か月後に、辻先生から「半年後に「人間科学とは何か」で講演してください」と依頼されるなどとは思いません。

それで慌てて人間科学に関する文献を調べ始めたのですが、しばらくして、しよせん新任の人間科学科教員が付焼刃でこしらえた人間科学観など、実践的な説得力をもちうるはずがないと気づき（あるいはそれを言い訳に）、「人間科学とは何か」の答えを直接探すことは早々に諦めました。そのかわり、哲学研究者としてさしあたりできることは何かと考えたところ、問いの答えを考える前に、問いそのものについて、それがどのような問いであるかということを考え、明確化することだろう、と思い至りました。哲学の伝統的な問題についても、そもそも何が問われているのかが共有されていないために、議論が平行線に終わるとい

うことはよくあります。「人間科学とは何か」という問いについても、同じようなことが起こりますから、まずはこの問いが問うものについて共通認識を得ること、あるいは少なくとも、そのような共通認識の必要性を共有することができれば、多少なりともこの探究に貢献したことになるだろうと考えました。

そのようなわけで、「「人間科学とは何か」を考える」という本講演のタイトルは、「人間科学とは何か」の答えではなく、この問いそのものについて考える、という控えめな意図を示すものであるとご承知おきください。

2. 「人間科学とは何か」が問うもの

いったい「人間科学とは何か」という問いは何を問うているのでしょうか。哲学研究者として最初に思い浮かぶのは、「人間科学の本質」、すなわち、あらゆる人間科学の営みが共有する、人間科学にとって不可欠の要素・性質です。しかし、そうだとするとこれは非常に難しい問題です。そもそも「人間科学」という概念を構成する「人間」も「科学」も、それが何であるかということは容易ならざる問題ですし、哲学者が理論上の答えを出したとしても、あとでそれがあっさり覆されるということは哲学史において珍しくありません。たとえば、ある種の近代哲学的な人間観では、人間は理性や自律性をもった、ほかの動物とはかけ離れた存在者とされましたが、その後の生物学や心理学の発展と共に、そうした特権的な人間観は崩れました。また、20世紀初頭に流行した論理実証主義は非常に厳格な科学観を提示しましたが、それはあまりに狭く限定的で、現実の科学の多様な営みを包括しえないものでしたので、やがて下火となりました。その反省から、現代の科学哲学では、実際に成功した科学の営みを反映した、もっと多元的な科学観が展開されております（伊勢田 2003）。結局のところ、これらの問題の答えは科学の実践を通して次第に明らかになる、というのが実情でしょう。このような状況にあって、「人間科学」というものの本質を、哲学者が理論的に特定することは極めて困難、というより、ほとんど不可能に思えます。いやことによると、そもそも「人間科学」に定式化できるような本質などない、という可能性もあります。

そこで、人間科学の本質を探す前に、その実情、「人間科学の事実」を調べる必要があるように思えます。「人間科学」と呼ばれるものが、現実問題としてどのような営みとして展開されてきた／いるのか、と。むろんこれはある意味で重要な知見を与える調査にはなるでしょう。しかし残念ながら、そうした知見もまた、それ自体としては「人間科学とは何か」という問いが求める答えではないように思えます。というのは、そうした人間科学の実情は、しばしば「困った現状」としてネガティブに語られ、むしろ「人間科学とは何か」という問いを発する前提・動機として語られてきたからです。たとえば、「いくつかの著名な大学に、人間科学ないしそれに類似の名称がついた学部がある。ではその正体が何かというなら、統一された学ではなく、複数分野の専門家の集合というのが実情であろう」（養老 2008: 21）、「筆者も含めて、人間科学それ自体を自らの専門と標榜する教員がいないのである。言い換えれば、本学の人間科学とは、人間科学に包含される学問領域の総体ではあるが、「人間科学とはなにか」という問いに正面から答えてこなかったのである」（辻 2023: 16）、と。つまり、「人間科学とは何か」という問いは、「人間科学は実情としてはしかじかであるが」という前置きのもとに発される問いでありますから、「人間科学の事実」はその答えにならないわけです。

そうすると、この問いが求める答えは、事実と対比される価値的なもの、すなわち、現状に留まらず、それを超え出た「人間科学のあるべき姿」、いわば「人間科学の理想」なのではないでしょうか。実情はどうあれ、人間科学はどこに向かうべきなのか、人間科学者の究極の目標はどこにあるのか。「人間科学とは何か」とは、こうした理想を求める、優れて実践的な問いなのではないでしょうか。そう考えると、この問いが切実に問われ続けていることも当然に思えます。プラトンは理想（「善のイデア」）についてこう語っています。

すべての魂がそれを追い求め、そのためにこそあらゆる行為をなすところのもの、——それがたしかに何ものであると予感しながらも、しかし、そもそもそれが何であるかについては、魂は困惑してじゅうぶんに把握することができず、さらに他の事柄の場合のように、動かぬ信念をもつこともできないでいるもの、——そしてまさにそのために、そういう他の事柄についても、そこに何か役に立つものがあつたとしても、とらえ損なうことになってしまうのだが、——じつにこのような性格の、このように重大なもの…（プラトン『国家』505E）

理想とは人生の究極の目的であり、私たちはそれがどこかにあると感じ、それを目指そうとするものの、本当のところそれが何であるかを確信することはできない。もしそれを見誤れば、本当は大切だったものを置き去りにしてしまい、後悔を招くことにもなりうる。まさに理想とはこうして重大でありながら掴みどころのないものですから、私たちは理想について、実情や既存の考えに満足せず、絶えず吟味し、問い直し続ける必要があります。「人間科学とは何か」という問いは、まさにこうした「人間科学の理想」を求める問いなのではないでしょうか。

3. 「人間科学の理想」を求めて

それでは、人間科学の理想とはどのようなものであるのでしょうか。人間科学者は何を目指せばいいのでしょうか。いまの私にはその答えはありません。ここではただ、そうした理想を語る一例として、非常に野心的な人間科学観を紹介したいと思います。18 世紀スコットランドの哲学者デイヴィッド・ヒューム（David Hume, 1711-1776）は、「経験と観察」に依拠した、万学の基礎たる人間科学を構想しました。

あらゆる学問は、多かれ少なかれ人間本性と関係している。数学や自然哲学（科学）…ですらある程度「人間科学」に依存している。というのも、それらは人間の認識能力の範囲内にあり、人間の能力によって判断されるからである。もし人間知性の範囲と力を知り尽くせば…それらの学問にどれほどの変革と改善をもたらすことになるか、予想もつかないほどだ。…重要な問題で、その決着が人間科学に含まれないものはなく、人間科学に知悉するまえに、確信をもって判断できることなどない。（ヒューム『人間本性論』T 0.4）

つまり、どんな学問も人間が営んでいる以上、人間そのものについて研究する人間科学こそ万学の基礎たりうる、ということです。もちろん、これは非常に単純な発想にもとづく、前時代的で大言壮語がすぎる理想ですが、理想とはもとより掴みどころのないものですから、これぐらいの気概をもって、大胆に「人間科学の理想」について考え語り合ってみるのもよいのではないのでしょうか。さらに踏み込んで言えば、たとえ単一の理想像を共有できずとも、たとえどの答えにも確信がもてずとも、あくまで人間科学の理想に関心をもち、探究し続けること自体、「人間科学者」の 1 つの共通基盤となるのではないのでしょうか。それとい

うのも、そのような関心や目的意識こそ、「私は人間科学を専門としている」という自覚や矜持の源泉となるでしょうから。その意味で、「人間科学とは何か」というまさにこの問いこそ、人間に関する諸科学の専門家を結集させ、人間科学を存立させる鍵であるように思います。

参考文献

伊勢田哲治. 2003.『疑似科学と科学の哲学』. 名古屋大学出版会.

全国人間科学系部局連携ネットワーク. 2023.『会報「人間科学」』第 1 巻.

ヒューム, デイヴィッド.『人間本性論』(Hume, David. 1739-40. A Treatise of Human Nature. Hume Texts Online.
URL=<https://davidhume.org/texts/t/full>) .

プラトン. 1976.『プラトン全集 11 クレイトポン・国家』岩波書店.

養老孟子. 2008.『人間科学講義』. ちくま学芸文庫.

人間科学宣言

人間科学は、人間という存在を究明しようとする様々な学問分野で構成され、その成果は、すべての人間の尊厳と幸福に資するために用いられる。そのため、多様な人々との出会い対話を重ねる場を重視し、学問知と社会に遍在する知との交差から新たな知を紡ぎ、新しい社会を創造することを目指す。

1972年に初めて人間科学の考究を担う学術機関が大阪大学に創設されて以来、全国各地の大学で人間科学の名のもとに大きな動きが形成されてきた。わが国の人間科学50周年となる節目に、人間科学がめざす未来に向けて、以下のとおり宣言する。

1. 人間科学は、多様な学問領域の創発的な発展をめざして、研究・教育・実践において活発な相互交流を行う。
1. 人間科学は、学術的専門性を狭く規定することなく、多様な人々との交流から学び、社会課題に人々とともに取り組む。
1. 人間科学は、人間の営為に関心をもつ人々を、社会を支え創造していく新たな人材として育成する。
1. 人間科学は、誰の誰に向けた取り組みなのか、そこから生まれる知は誰に属するのかといった問いを堅持する。

以上をもって、人間科学は、人類の未来に深く貢献する学問としてその固有の存在意義を追求し続ける。

2022年12月4日

全国人間科学系部局ネットワーク加盟大学

部局長一同



Human Sciences
Intercollegiate Network

全国人間科学系部局連携ネットワーク
2025年度年次大会 第3回フォーラム人間科学



文教大学

文教大学越谷キャンパス (12号館 12101教室)

暮らしの中の 人間科学

2025年
11.30 日
10:00 開演
9:30 受付開始
参加無料

2025年度 公開講座タイムスケジュール

10:00~12:00	文教大学における人間科学の実践報告：教育と日常生活のクロスオーバー
13:05~14:00	鈴木 浩明 先生 「身近な鉄道の人間科学」 (鉄道総合技術研究所人間科学研究部主管研究員)
14:05~15:00	四柳 宏 先生 「健康情報の活用を考える」 (国立健康危機管理研究機構理事・東京大学医科学研究所特任教授)



Zoomオンライン
同時配信

お申し込み方法
QRコードから▶
※Googleフォームにリンクします



参加申込
必須

主催：文教大学 人間科学部・大学院人間科学研究科・生活科学研究所
後援：越谷市・越谷市教育委員会

編集後記

本誌を編纂していると自然に「人間科学」とは何かということを考えてみたくなる。しかしそれは「人間科学」が、他の心理学や社会学、経済学や政治学とは異なるからだろう。たとえば、心理学とは何かと問えば、それは二つの方向、すなわち心理学の歴史か、心理学の最新の研究動向やトレンドあるいは最新の知見ということになる。他の学問にしても基本はそうだろう。しかし「人間科学」とは何かと問うて、最新の知見の議論でもってそれに換えられると考える人はまれであり、学問としての歴史を語ってそれでよしと感ぜられる人も多くはない。

わたしは科学史への愛着があるので、しかしながらやはり人間科学の学問としての歴史ということとは考えてしまう。とはいえ、これも言えることはそれほどはっきりしたことではなく、少なくとも一つの起源として、人間の科学というということを主題化した 19 世紀の実証主義哲学者であるオーギュスト・コントの名を挙げることができるくらいだ。これにしても、同時代のドイツやイギリスの全く異なる複数の文脈との共鳴関係へと広げて考える必要が生じるが、そうすると自然にその「起源」という概念それ自体が解体されてしまう。

「人間科学」が拡散的であるのは、それがやはり分野横断的な側面を強くもつからに他ならない。おそらく直近の起源というのは、戦間期フランスの「総合国際センター」に集まった歴史学、社会学、精神科学、物理学、哲学、科学史などによる分野横断的な研究スタイル（おそらく社会学者＝人類学者モースによる全体的人間の科学の影響もあっただろう）とドイツのフランクフルト学派（「総合的理性批判」）のあたりの野合したイメージではないかと思われる。あるいは、もしかしたら 1940－50 年代のメイシー会議に代表されるようなサイバネティクスなどの多種分野が議論して新しい学問を生み出していくというイメージも参照されていたのかもしれない。

いずれにせよ、人間科学とは、特定の学問分野や研究分野に還元されないというのがその否定的特徴である。では肯定的特徴とは何か。それはおそらく同じことなのだが、異なる文脈の学問が複雑怪奇な「人間」をめぐる現象を基点として、しかしそれを一つの文脈に完全に還元してしまことのないままに共役可能な部分を作り出していく、そういった学問分野であるように思われる。だから人間科学は心理学にも社会学にも教育学にも還元することはできず、それらに純化されたならもはやそれは「人間科学」ではなくなる、そういった何かであるのだ。このやっかいな性質は、実のところ人間という現象のやっかいさに由来するようにも思われるが、たしかにこういった問題について主題化して議論するための場所というのは、あってもよいのかもしれない。そんなことを考えながら、本誌がはたす未来の役割について夢想させられる仕事だったと思われる

本文（文責・近藤）

会報「人間科学」 第 3 巻 2025 年 11 月 30 日発行

発行元：全国人間科学系部局連携ネットワーク

本書の掲載内容（文章、写真、画像など）の一部および全てについて、事前の許諾なく無断で複製、複写、転載、転用、編集、改変、販売などの利用を固く禁じます